



玉川上水流域で唯一下まで降りられる小平監視所は、子どもたちにも人気の散歩コース

玉川上水の貴重な自然を守り、次世代に引き継ぐために大切なことは何か？ 玉川上水の生物多様性についてのシンポジウムが4月22日、小金井市で開かれる。

4月22日  
小金井市で  
シンポジウム

江戸時代からの上水は今も現役

今から365年前、江戸市中へ飲料水を供給するために築かれた玉川上水。羽村取水堰から四谷大木戸まで全長約43km(うち暗渠部13km)、高低差は93mある。動力は一切使わず、武蔵野台地の尾根筋に引かれた水路は、江戸の下町まで多摩川の水を届けることができた。現在でも、一部区間は現役の水道施設として東京都水道局が管理している。2003年、玉川上水350年を記念して、国の史跡に指定された。

# 豊かな自然を未来に繋げたい

## 緑と桜が共存する玉川上水に



加藤嘉六さん  
(撮影: 蔵前ノリ子)

玉川上水の自然を守りたい

玉川上水の自然林は、東京に残されたグリーンベルトだ。近年都市部ではあまり見かけなくなった希少な動植物の「住みか」になっている。

「繋がることに意味があるのです」と、玉川上水の写真を撮り続けている写真家の加藤嘉六さん(小金井市70)は言う。現在使っていない箇所も、修理すれば山間部の上流から都市部の下流まで繋げることができるという。皇居の堀に水を入れたり、神田川から日本橋まで水を通したりすることも可能だろう。今、使われていない部分があっても、将来再利用ができる。玉川上水はとても利用価値がある史跡なんです」と加藤さん。

桜も樹木も共存できる自然を

東京の水と緑を守る上で大切な役割を果たしている玉川上水で、今、自然林の伐採が行われている場所がある。小金井市の「玉川上水・小金井桜整備活用実施計画」に基づき、小金井橋から梶野橋までの約1.5kmの区間だ。



3つの地区に分け、既に伐採された所と、これから伐採予定の所がある。伐採された所には、名勝小金井桜の復活事業で桜の苗木が植えられているが、自然林がなくなり五日市街道の排ガスが流れてくるようになったなど、周辺住民からの苦情も。木陰がなくなり地表温度が上昇、真夏の温度差は自然林と皆伐地区では26度もあったという。

地表温度調査の実施もしている「小金井玉川上水の自然を守る会」では、桜を植えるなら皆伐ではなく、自然林を残し、桜と他の樹木との共存を提唱している。加藤さんは会の代表を務めている。「玉川上水の自然環境と生物の多様性を活かした植生管理はこうあるべきか、今回のシンポジウムで考えたい」と、自然地理学・地生態学が専門の東京学芸大学名誉教授の小泉武栄さん(株)環境指標生物代表の新里達也さん、国連生物多様性の10年市民ネットワーク代表でNGO慶十の会代表の坂田昌子さんの3人から話を聞く。

■玉川上水と生物多様性―玉川上水の宝物を未来につなぐ― 4月22日14時、小金井市民会館萌え木ホール(武蔵小金井駅南口7分)。3000円。小金井玉川上水の自然を守る会主催。☎042・38871546加藤さん

■玉川上水の自然観察会 5月19日13時〜15時半、平右衛門(へいえもん)橋(小金井公園正面入口前)集合。森林インストラクターの大山征夫さんを講師に、平右衛門橋から境橋までを往復する。無料。予約不要。雨天中止。小金井自然観察会主催。問い合わせ☎090・43992・2556大石さん

遊歩道の地表温度を調査する。猛暑日でも自然林が残る所はひんやりと心地よい